

---

# 巴と翔

咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

巴と翔

### 【Nコード】

N9753I

### 【作者名】

咲

### 【あらすじ】

「私頭良かつたのよ」

日本人がそんなこと言っちゃっていいんですか！でも巴ちゃんは言っちゃうんです。だから翔君、話聞いてあげて！

## 巴の学生真面目論その他

「私ねえ、頭良かったのよ」

「は」

「小学校の頃校区悪くてすごいあほな子ばかりだったんだけど…  
そういう子と私の授業料って一緒じゃない」

「お前めちやくちや言うな。」

「事実だもん。それである日思ったのよ、一回で理解できてる私と何回も質問してるやつと比べたら私の方が圧倒的に先生の拘束時間短いじゃない。それなのに同じ授業料払って私損してるって」

「それは…しょうがないんじゃないかねえのか。普通そういうもんだろう」  
「私普通になる気ないのよ。だから理科の実験のとき理科室にあったカバーガラス10枚ぐらい割ってやったわ」

「…」

「ガラスとは思えない割れ心地なのよ」

「俺は割ったことないから知らん」

「一枚ぐらい割ったことないの」

「ねえよ」

「やってみたらよかったのよ」

「俺は真面目だったんだよ」

「真面目って自慢されても…」

「自慢はしてない」

「でも俺はお前と違って真面目だった、っていうことでしょ。わざわざ差別化するってことは少なくとも真面目じゃないことに何らかの嫌悪感を抱いて自分はそれとは違うって言いたいってことでしょ」

「そこまで考えて喋ってねえよ」

「それはわかってるわよ！でも言ってみればそういうことでしょ」

「…まあそうかな」

「真面目なのがそんなに良いのかっていう疑問はずっとあるのよね

「  
」

「なんていうか世間的に良いとされてるものというか、遊び心が無いというか、やることやったりや別に真面目じゃなくてもいいじゃないの?」

「俺はそんなに遊び心もないほど真面目じゃないぞ」

「うーん、あんたは先生の前でならおとなしくはするわよね。無理に逆らったりしない」

「普通無理には逆らわねえだろ」

「そうそう!そう、普通なのよ。めちゃくちゃ日本人らしいというか」

「日本人だからな」

「でも授業中ちゃんとノート取っておとなしくて提出物出してテストで平均ぐらいとる子って真面目って言われるのよ」

「まあ、真面目じゃないか」

「でも私は授業中は寝るし喋るし提出物なんか出したことないけど…テストはもつといいわよ」

「知ってるよ」

「で、こういうことあると真面目と言われる子たちは何故か私に反感持つのよ」

「うーん…持つ気持ちが全く分からないでもないんだが」

「でもこっちとしては持たれても困るし、あんたは私に反感なんか持ってないでしょ」

「ああ、それは家でお前がちゃんと勉強してるの知ってるからだ」

「知ってなくても自分より何かがうまくできてるやつが自分よりサボってるわけではないことになんて気付かないのかが不思議」

「それは…アホなんだろ」

「勉強的じゃない意味でね」

「勉強的じゃない意味で」

「でも同じ時間勉強したからって同じように成績上がるわけじゃない」

いと思うのよ」

「お前は勉強時間少ないもんな」

「少ないと思うわ。というか先生のいいなりになって膨大な量の宿題を片付け仕事でやっても意味ないのよ、自分が分かるまでやりやいいのよ」

「そりゃそうなんだが…」

「なんであなたは意味なさそうな宿題までやるの」

「なんでって言われてもなあ…やるかどうかはともかく普通やらなきゃならんと思うもんだろ、宿題は」

「普通、って要はなんとなくってことよね」

「あ…まあ」

「またそこまで考えてないってやつね。真面目っていうのは先生の言うなりになることじゃなくて自分の習った範囲を本当に理解するために努めることだと思うんだけど」

「お前の言ってることは間違ってはなないけどな」

「でも私みたいなのは真面目って言わないでしょう」

「言わねえ」

「だから本来の意味じゃなくて普段真面目っていうのは長いものは巻かれるというか、上に立つ人が管理しやすいようにこういうのがいいことだよ、って刷り込んだ結果な気がするのよね」

「納得できなくはないが…やっぱり普段そこまで考えてねえよ」

「私もこう考えててもあんた以外に喋ろうとは思わないけどね」

「へえ、そうか」

「こんなん表に出して生きてたらしんどいわよ。敵作るばかりで、確かに敵は作りそうだな」

「半出しぐらいよ。あんたみたいに全部隠しては生きてけないから」

「半出しって…」

「まあ出せるのも若いうちだけだろうし」

「冷めてるな」

「冷静なの。あ」

「何」

「さつき同じ勉強したって一緒に成績あがるわけじゃないし、私は勉強時間少ないって言ったけど別に周りを馬鹿にしてるわけじゃないのよ」

「ああ、そう。まあお前は頭いいとは思っよ」

「だからってそんな良いわけでもないから天才でもなんでもないわ。勉強のコツを心得てるだけというか…」

「勉強のコツを心得られるのが頭いいんだよ」

「うーん…そうなってくるとやっぱり何らかの才能はあったのかなとも思っただけど」

「だけど…何」

「人それぞれだと思っのよ」

「何が」

「私は勉強のコツを心得られる才能があっただけど音楽とか料理とかは全然駄目。あんたは料理上手じゃない」

「やったらできるよ、あの程度なら」

「自分のことはみんなそうなのよ！やろうと思っても私はあの程度ができないのよ」

「うーん…そうかあ？」

「そりゃあめちやくちや努力したらできるようになるかも知れないけど、あんたと同じ経験値であそこまで料理できないわ」

「ふーん…じゃあお前は俺と同じ経験値でも勉強なら俺よりいい成績出るってことか」

「そういうことよ」

「でもやっぱり成績いいと地位は高い気はするな」

「学校行っつると成績がいい奴がなんでもできるような気がしてくるのよ、学校は勉強するところ、っていうぐらいだから」

「あー、なるほどな」

「学生のうちはともかく社会に出たら勉強なんかできなくても一人前の仕事できる人いっぱいいるんじゃないかしら」

「だろうな」

「社会でたら他の何が色々できて学校勉強と同じように金を稼げるやつが一番偉くなるんじゃないの」

「もうちよつと夢持てよ」

「社会のそういうもの全部諦めて受け入れるタイプのあんたに言われたくないわ」

「…これもやつぱりそこまで考えてねえな」

「まあ…それもあんたの良いこと繋がってるから直せとも思わないけど」

「良いこと繋がってるか？あんまり考えないのは自分でも悪いところだと思わなくはないんだが」

「良いところと悪いところはセットだと思うんだけど。八犬伝に出てきた誰かも世の中のすべてには陰陽があつて…みたいなこと言ってた気がするわ」

「八犬伝？」

「南総里見八犬伝」

「ああ…日本史で習ったな」

「とにかくそこにそう書いてたから、あんたはそのままが良いと思うのよ」

「ああ、そりゃありがたい」

## 巴の学生真面目論その他（後書き）

また次ぐらいに巴と翔の関係の説明も…できたらよいなと思います。



## 出会は

「あんたもうちよつと自信持ちなさいよ」

「へっ?」

黒く濡れたような睫毛と黒目がちな瞳がこっちをまっすぐ見ていた。

これが巴とせえと翔かけるの最初の会話だった。

巴は翔の親戚ともいえないような遠い親戚だ。名字にかろうじてその形跡が残っていた。

二人ながら漢字で書くと天星という名字をもっているが、巴は「てんせい」、翔は「あまほし」と読ませる。

巴の両親は巴が生まれる前に離婚してしまったため、巴は母親一人の手で育てられた。しかしその母親も巴が十九の時に病気で死んでしまった。その際天星家てんせいには近い親戚がいなかったため、巴はめぐりめぐって翔の家に回ってきたことになる。巴が翔の家に引き取られることになるまで色々な経緯があったそうだが、そのところは翔は知っていない。翔が知っているのはとにかく遠い親戚の同い年の女の子が自分の家に引き取られるということだった。

翔にとって自分の家に全く知らない女の子が来るということは衝撃ではあった。しかし、翔がそれを知ったのは巴が来る四日前だった。つまり翔と両親の関係はそんな関係だった。翔の家族は両親と翔の三人家族。その一人息子にすら巴という親戚の女の子を引き取る話をしない両親だった。特に両親にいじめられたような記憶はないが万事が翔に無関心な家だった。それに対応して翔もどんな家族に対する関心を失っていったことになる。だから翔がどうも自分の家に女の子がくるらしいと言うことを知ったのも偶然両親の会話

を耳にしたことによる。

「初めまして。天星巴てんせいです。今日からお世話になります」  
初めて巴が来たときも翔が呼ばれることもなく両親のみが対応していた。

普段あまり聞くこともない両親の愛想の良い対応に

(そういや昔女の子が欲しかったとか言ってたっけ…)  
そんなことをぼんやり思い浮かべていた。

女の子の顔ははつきりとは見ていないが、華奢な体型と長い髪が目に入った。

(まあ俺には関係のないこと…)  
そう思っていたのだが。

今度新しく家族になった女の子は無関心では終わらせてくれなかった。

巴が住む部屋は翔の部屋の隣にある空き部屋で、両親との挨拶を済ませた彼女はそこに小ぶりな荷物を運んでいた。

そこに顔を合わせたのが翔である。一つの家で隣の部屋に住む女の子と関係なしで生活していけるわけがなかったのだが…。

翔自身、

「あのときはとりあえず自分には関係ないと思うのがくせだったからなあ」

と思い起こすのみだ。

それにしても越してきて当日いきなりのこの一言は強烈だった。

「あんたもうちよつと自信持ちなさいよ」

「へっ?」

よくもこんな間抜けな声が出せたもんだと後で自分で思うほど間抜けな声が出た。

しかしこの時は、目の前の女の子が何を持ってしてそんなことをいうのか、いや、そんなことも考えていたかどうかもわからないほど、訳がわからなかった。間抜けな声での対応も仕方なかった。

「自信って…?」

訳がわからないままに何とか疑問をぶつけてみたが、そんな翔をおいてけぼりに巴の攻撃は続く。

「あのね、私に反感持ってもしょうがないでしょ?そりゃ私も悪いとは思ってるわ、急に住むことになって」

「あの…俺別に反感は…」

先ほど彼女から受けた印象、遠い親戚に身を預けなければならなくなった身にふさわしい華奢な印象は翔の中からふっとんでしまった。もちろん、彼女の体型が細身であることに変わりはないのだが。

「反感っていうのは…あ、そうだ。名前、何て言うの」

「…翔」

「私、巴。一応あんたと同じ漢字で天星てんせいって読むんだけど、めんどくさいから今日から私も天星あまほしでいいわ」

「はあ」

「よろしくね」

「よろしく…」

「…」

「…」

「あの…巴…さん?」

「巴で結構。同い年ぐらいでしょ?いくつ?私十九なんだけど」

「俺も十九です」

「敬語も要らないわ」

「…」

「したい話が一つも進まない。」

「あの…自信って何?」

「あー!あの話ね、気になってたの?」

「普通気にならないか、いきなりあんなこと言われて」

「もつと無関心なのかと思ってたわ」

「え……」

「だって私が来てもなーんも反応しないんだもん」

「いや…それは」

「普通自分ちに他人住むことになつたら気になるでしょー」

「……」

「ならない？」

「ならん…かったかな」

「でも自信持ちなさいよは気になったのね」

いつの間にか巴はニコニコ笑っている。それを翔は不思議に思いながらも、不快には感じなかった。

「…まあ、そう」

「じゃあ、聞く？」

「…ああ」

「長いわよ」

「え……」

間髪入れずに

「いい？まず私は今日来るまでこの家にあんたがいることを知らなかった。この家にお世話になること自体は五ヶ月前には大体決まっていたのよ。だからあんたの両親とも私は何回か話してるし、私が使わせてもらう部屋の話とかその他色々聞いてるのよ。それなのにあんたの話は一回も聞かなかつた。つまりあんたの両親はあんたのことで口々に気にかけてないのよ。普通自分の息子の意見聞くでしょ？全然知らない他人が自分ちに住むことになるのよ。それを私に話さないのもどうかと思うけど、まあ私はお世話になる側だから贅沢言わないとして…この様子じゃあんた聞いてないみたいじゃない？ここまでであんたと両親の仲は希薄なんだと推測したの。で、次に実際に私が来たときのあんたの反応とここの両親の反応。私には暖かく接してくれる両親を見てあんたは私に反感…は言い過ぎかもしれないけどなんらかの感情を持たなかつた？持つことを私は全くおか

しいとは思わないけど、もったいないなあ…と思って。だってあんな両親に素っ気なく扱われたらもうっつと性格ひねくれてもいいのに、あんた見たところでただけだけどどうもちよっと人に無関心になっただけでやってるみたいじゃない？優しいんだろうなあと思って。そんないい人なのに両親が素っ気ないっていうだけで自分駄目だと思ったり、私に反感のような感情を持つのはもったいないわよ。いい人なんだから自信もって！…ということよ

「…長い」

「長いつて言ったじゃない」

長い、ということ聞いてから翔に反応する余地は無かったことを巴は気にしないらしい。

(でもこいつの言ってることは当たってるかも知れんな…)

翔自身、自分でも気付いて無かったが両親から自分の受けたことのないような対応を受ける巴を見て羨望のような感情をもったかもしれない。そしてそれは両親の素っ気ない対応を受け続けて自信がなくなっていたことに起因していたかもしれない。

しかし、それを一瞬眼があっただけで見抜かれるとは。この事實は少なからず翔を驚かせた。

「あのね、両親は子供を可愛がるもんだっていうのはメディアの妄想だからね」

「えっ…」

「言い過ぎよ、言い過ぎだけどね」

「…」

「でも子供なんかほつといたら育つでしょ、っていうぐらいの方が私は好きなのよ」

「ほつといたら…」

「あんた自分自身どうなの、育ってるでしょ？」

「まあ…育ってます、育ってるけど」

「可愛がるもんだと思うから可愛がられなかったら自分が悪いんじゃないかと思うのよ」

「ふーん…?」

「でもそれはメディアの刷り込みだから。可愛がられなくてもあんたはちゃんと育ってるんだからいいじゃない」

「ちゃんと育ってるかどうかは…」

「ちゃんとしていうのはどういうのを指すのかわからないけど…少なくとも人殺したりしてないんだからいいんじゃない?」

「え?」

「殺してるの?」

「殺してねえよ」

「じゃあいいじゃない。もっと上目指すの?向上心あるわね」

「上目指すわけじゃ…」

「じゃあいいじゃない」

「いいのか」

「いいのよいいのよ」

「なんだか巴の言うことを理解できたのかどうかそれはまだ翔の中でははっきりしていない。」

それでもこのことがあったから翔と巴は初日からすっかり仲良くなってしまった。

ここは巴の部屋と翔の部屋をつなぐ廊下である。普段黙りこくっている自分がこんなに話をしたことにふいと恥ずかしさを覚え、両親はどう思っただろうかとリビングの方を見た翔に

「あんたの両親、私と話したあと外出したから大丈夫よ」

と、巴が言ってよこした。

## 出会は(後書き)

巴と翔、こんな出会い方をしました。

## 日本と日本人

「ああ……」

幸せそうなため息をつきながら巴はコップで日本酒を飲んでいる。どうも大学の帰りにでも買ってきたものらしい。

「日本人はやっぱり日本酒よねー」

もちろん今日も巴の隣には翔が座っている。そもそもがここは翔の部屋なのだ。翔の両親が外出すると巴は翔の部屋に入り浸ることが多い。

「あんたの部屋の方が居心地いい」

のだそうだ。フローリングの床に机とベッドしかない部屋なのだが。その机に巴は堂々と一升瓶を置いている。

「巴は俺と同じ年だよな」

「そうよ」

「何歳だ」

「同じ年よ」

「十九だよな」

「そうよ」

「酒……」

「ああ、あんた、法律なんかあんなもん迷信よ迷信」

「違う違う違う」

「だって私の脳細胞が死ぬだけよ、国のお偉方に気遣ってもらわなくて結構」

「そりゃそうかも知れんが」

「それに家でこうやって飲んでる分にはバレないのよ」

「バレなきゃいいのか」

「バレなくても自分の悪いと思うことはやっっちゃ駄目よ」

「へえ？」

「法律で禁止されてなくても自分の悪いと思うことはやっっちゃ駄目



なのよ」

「そうか。悪いことって…」

「私が悪いと思う事よ」

「どういふ事を思うんだよ」

「うーん…気分…」

やや眠たげな声を出しながら、巴はポコポコと二杯目を注ぐ。

「あんたも飲む？」

「いや…」

「ヨーロッパではもっと早くから飲めるところ多いのよ」

「そいやそうだな」

「日本も欧米大好きならそういうところから憧れてほしいわ」

「欧米大好き？」

「大好きじゃない、ニュースもカタカナ語多いし」

「ああ確かにな」

「日本語で言えばいいじゃない、日本語あるんだから」

「巴は日本好きなんだな」

「日本は最高よ、日本酒も」

「じゃあ法律も守れよ」

「政府は別モノ」

「あっそう」

「グローバル社会とか言うけど日本のグローバルなんか欧米の言語喋れてその辺の国相手に金稼ぎできたらそれでいいのよ」

「まあ欧米の話しか聞かねえもんな」

「グローバルの訳語変えちゃえばいいのよ」

「何に」

三杯目の酒をコップに注ぎながら巴は短く答えた。

「欧米社会の盲信」

「盲信とは思ってないんじゃないか、盲信してる奴は」

「だから盲なのよ」

「なるほど」

「でも欧米にも好きなところあるわよ私」

「ふーん」

「ずばつと物言うところなんか好きよ」

「確かに巴のオブラートに包んだ発言は聞いたことがない」

「どうせ同じ内容言うならわかりやすくずばつという方が私は好きなのよ」

「個人の好みの問題か」

「個人の好みの問題よ。日本語の曖昧表現が好きな人もいるでしょ。それはそれでいいと思うのよ」

「でもそれは時々問題になってないか」

「だからね、欧米の人間には通じないのよ曖昧表現」

「だろうな」

「欧米なんかみんな自分とこの国が一番偉いと思ってるんだから」

「一番偉いか…」

「だから日本では曖昧表現が美德なんです、っていうことをまずはずばつと伝えなきゃ駄目なのよ」

「…ややこしいな」

「要は今欧米中心社会だから向こうに合わせなきゃ駄目なのよ」

「ふーん…なんで欧米中心社会になったんだろうな」

「勝てば官軍」

「やっぱりお前オブラートに包めんな」

「いいのいいの。でも欧米中心社会は腹立つわ」

「腹が立つたせいか巴はコップに三分の一ほど残っていた日本酒を一気に飲み干した。そして間髪入れず一升瓶に手を伸ばす。しかしその前に翔が瓶を掴んだ。

「あ、注いでくれるの」

「いや…もうやめとけよ」

「大丈夫大丈夫」

「もう三杯飲んでるだろ」

「あのね、このコップ一杯一合ぐらいなの」

「一合…」

「十合で一升ね」

「ああ」

「私まだ三杯しか飲んでないのよ、たったの三合よ」

「たったの…か？」

「とりあえず、注いで」

コンツと音を立てて巴がコップを置き直した。先ほどの眠気など吹き飛んでしまったかのような切れのある動きである。瓶の首を掴んだまま躊躇する翔に巴がさらに追い打ちをかけた。

「…っていうかあんたも飲まない？あんたが飲まなかったら、私一升全部行くわよ」

「全部ってそんな…」

「飲めるわよー、最高記録三升。あの時はお酒が無くなったんだけど、あつたらもつと行けたわ」

「…」

返事の代わりに翔は巴のコップに大人しく酒を注いだ。

「ありがとう」

嬉しそうな巴の顔は十九歳にしては幼く見える。しかし自分のコップが日本酒で満たされているにも関わらず、翔の手を離れた瓶を掴む巴。そしてもう一つのコップを机に置く。

「それって…」

「コップ」

「わかってるよ」

「最初っから机の下に」

「置いてたのか」

「独り酒は寂しいのよ」

そう言っている間にコップには酒が注がれてしまった。巴と暮らすようになつて数ヶ月、翔も諦め時はよくわきまえている。仕方なく酒に口を付けた。

「…おいしい」

「日本は最高なのよ」  
「でもコップなんだな」  
「欧米の汚染よ」  
「汚染か」  
「やっぱりおちよこか茶碗でいきたいところよねー」  
「茶碗は…男前すぎないか」  
「男前?!」  
「え…」

過剰とも言える巴の反応に翔は驚いた。

「あんたその話私に振らない方がいいわ」  
「その話？」  
「女らしい男らしいの話。その話するには酒が足りないわ」  
「そんなに話すことあるのか」  
「朝までいけるわよ」  
「じゃあ…また今度聞くとよ」  
「あら、何でまた」  
「お前の話は常識が揺らぐから面白い」  
「わーい！じゃあまた今度一緒にお酒飲もう」  
「ああ」  
「日本酒はおいしかったでしょ」  
「ああ…おいしかった」  
「今度までにおちよこ買つていてね」  
「そういうと巴は颯爽と翔の部屋を出て行った。コップは二人分持つて行ったから片づけられるらしい。一升瓶は翔の担当ということだろう。いつの間にか一升瓶は空になっている。」  
（俺は一杯しか飲んで無いんだがな…）  
次に一緒に飲むときはどれぐらいの量の日本酒を用意すればいいものか、翔は爽やかに部屋を出て行った巴の後ろ姿を思い出しながら考えた。

## 日本と日本人（後書き）

ああ、お酒飲みたいな。と思って書いた話でございます。

巴ちゃんはお酒強いんですね。きつとザルでしょう。

翔の部屋が出てきたのでいずれ巴の部屋も書けたらなと思います。

次は多分女らしい男らしいの話では無いと思います…

二回連続お酒登場！っていうのもどうかと思いますので。

二回消えて少々心がくじけました。

## 人類最強

巴が翔の隣でテレビを見ている。

ここはリビング、巴が来るまで翔が滅多に足を踏み入れることの無かった場所だ。その事実を知ったとき巴は一言、

「変なの」

と言い放ったものだ。

とはいえ、巴もリビングでくつろぐことは少ない。おまほし天星家の両親が外出している隙を狙ってはノコノコと部屋から出て、テレビの前に陣取る。そしてその時に翔も一緒に引っ張り出さないことには気が済まないようである。今日も翔の両親が外出するや否や、レポート提出日のせまる翔を引っ張り出し、テレビを見始めた。

というわけで、引っ張り出された翔は巴の隣でレポートをしていた。正直な話、翔はレポートが好きではない。書いているうちにすぐに行き詰まるからだ。何を書きたいのかが自分で判らなくなってくる。

「うーん…」

悩んでいる様子の翔に巴はテレビから目を離さずに反応した。

「どしたの？」

「レポート」

「ご苦労様」

もちろんテレビを見たままであった。

「他人事だな…」

「他人事だもん」

「…」

「あんた真面目すぎるのよ、さっさとやりなさい」

CMが始まり巴はようやく翔に興味を向けた。

「真面目なことも無いと思うが」

「どうせ何書きたいのか判らなくなってくるんでしょ」

何で判るんだ、と言いかけてやめた。

「やっぱり」

と言われるのが恥ずかしい。代わりに翔は質問を投げかけた。

「巴は…そんなことないのか」

「まず書きたいことがないもの。有名な人が書いた本何冊か読んで、紹介して、ぴゅっと自分の意見を付け加えるだけ」

「なんだ…お前なら面白い意見でも言えそうなのに」

「あら、ありがと。でも駄目よ、私は有名じゃないもの」

「有名じゃない？」

「有名じゃない奴が斬新な発想を持ってきても根拠がないから駄目だ、って言われるのよ」

「そりゃ根拠がなけりゃ…」

「でも偉い人が書いた著作の中には、何だこれ、根拠ないじゃないか、っていろいろのわりと多いのよ」

「ふーん…？ そうなのか？」

「少なくとも私はそう思ってる。でも私が一番言いたいのは下っ端が何言っても駄目よ、ってことね」

「そういう話だったのか？」

「自分の意見通したかったら従順なふりして権力者に持ち上げられて権力握ってから自分の意見を言う事ね。でないといつまで経っても下っ端のままよ。誰でも自分の今まで築きあげたものが下から否定されて変わっていくことには反発するから。特に年寄りだね…」

「俺のレポートの話は…」

「頑張りなさいよ」

「…そうですね」

「あ、テレビ始まったから黙って」

「…」

ここは返事もせず大人しく黙る方が巴が喜ぶだろうと思いい、翔は再びレポート提出のため頭を悩ませた。もちろん今度はテレビを見ている巴に気遣って黙って作業を進めることにした。

「うーん…」

ところが、巴の方からこんな声が漏れた。

「…」

どうした？と聞く前に巴の顔色をうかがい、今発言してもいいかを確かめた。そして未だ巴の黒い眼がテレビに釘付けなのを見て翔も画面に目を移した。

「…………。ボクシング？」

そう、巴は格闘技を見ていた。スポーツ観戦が好きなのは翔も知っていたが格闘技を見ることは知らなかった。

「ボクシングじゃなくて総合格闘技よ…」

まだ眼と意識はテレビに奪われながらも巴は翔の疑問に答えてくれた。喋りかけること自体に不快感を表さなかった巴に安心し、翔は先程の疑問をぶつけてみた。

「どうかしたのか？」

「うーん…なんかね」

「うん」

「うーん…」

意識がテレビに集中してあまり会話にはならないようだ。黙って、とは喋りかけられても会話はできないということか。そうと気づいて翔がレポートに戻ろうとしたとき、

「何かね、おかしい気がするのよ」

巴のはつきりした声が聞こえた。どうやらCMが始まったらしい。

「何が？」

「こういうのってね、人類最強を決めるための戦いとか言ったりするじゃない？」

「うん」

「でも人類最強っていつてもゴリラには勝てないじゃない」

「うん？まあ、確かに」

「せっかく進化したのに進化しなかった方がこの人達にはよかったんじゃないかしら」



「判らないでもないよな…」

「残念ね」

普通は人間のままで最強を目指すことに意味があるんだ、と考えるところだが、ヒトという生き物に特別の尊厳も何も感じていない巴からすれば、それは「残念」でしかないのだろう。それが判って翔はふつと微笑した。そしてリモコンに手を伸ばす。

（何するのかしら）

とこつちを見る巴と眼を合わせて翔はテレビの音量を上げた。

「レポートできるよ」

何しろ巴は隣に座っている翔にすら何の番組を見ているのか判らない程小さい音でテレビを見ていたからだ。

## 人類最強（後書き）

じゃあ部屋から引つ張り出さなきゃいいのにな、と思うのは私だけでしょうか。

久しぶりですがこれからちよこちよこ更新できたら…。

## 読書の秋

かちやりと戸の開く音がして巴が首だけをのぞかせる。

「翔、元氣？」

人の部屋を開けてすぐという唐突さで巴は質問を投げかけた。どことなく空気が冷えてきた季節の変わり目の昼下がりである。今日は特に雨が降っているため朝から温度が低い。だから、巴の質問は、風邪の心配、と、思えなくもない。

「……風邪はひいてない」

翔なりに理屈を考えて答えたのだが、巴は（はあ？）という眼をするとボタンと戸を閉めて出て行ってしまった。そんな表情をするのは俺の方だ、と言いたいところだったが相手は既に翔の前から姿を消している。

（なんだったんだろうか）

翔が巴に対してこんな疑問を持つのは、いつものことである。そして、考えても無駄だと気づき（まあいいか）となるのもいつものことである。だから今回も例に漏れず、

（まあ、いいか……）

と先程から読んでいた本に眼を落とした。

それは2年ほど前に映像化された作品で、原作も大いに発行部数を伸ばしたものだ、今となってはすっかり安値となり古本屋で山のように売られている。少し破れた黄色い帯には大きい文字で『映画化、決定！』と斜めに印刷されている。元々は巴が150円程度で買ってきたものだったが、「面白くないから、あげる」と翔の部屋に置いていったのだ。

翔が「面白くないなら要らん」と反論する前に、「でもあんたが読んだら面白いかも」と付け足され、ありがたく頂戴してしまった。半ば強制的に翔の所有物になったその本は、しばらくは机の上に放置され殺風景な翔の部屋に人間らしい彩りを与えていたが、一週間

ほど前から少しづつ翔の手元に置かれるようになった。

その本を少し少しと読み進めていた翔は、この雨天を利用して一気に読んでしまおうと今日は朝から腰を据えて読書に勤しんでいたのだ。思わぬ巴の襲来で中断することとなったが、再び本に向かい合った。しかし一度集中力が途切れたせいも、雨の音がやたらと耳に付く。カーテンを閉めれば少しはマシになるかなと考え、本を机の上に伏せ、翔はカーテンを閉めに立った。カーテンを閉める音は今日の雨の音に似てる、そんなことを思いながら再び本に戻る。カーテンのお陰で雨の音も遠くなり、今度は徐々に本の中に意識を集中させることができた。そんなに分かりにくい内容の本でもないから、

(これは今日中に読み終えるな)

そう翔が、思った時。

巴の部屋から何とも元気そうな音が轟いてきた。

思わずびくん!としてしまった翔は、慌てて本を置いて部屋を出ると大して距離もない巴の部屋の前まで急行する。

先程の仕返しも含め、「巴、元気?」とやっても良かった。但し、今回の場合は安否を心配しての「元気?」である(とはいえ巴の場合、は意図が不明だが)。しかし、女の子、世の中が勝手に「仮にも」と冠したとしても、女の子である巴の部屋をぱかっと開けることなどできない翔であった。

だから、結局翔は

「巴大丈夫?何の音?」

と普通の心配をしてしまった。もちろん遠慮して戸は開けられないままである。

「巴、開けて良いか」

翔が声をかけるが、轟音のあとはしんと静かになってしまった。

返事も無い。巴の部屋の戸をコンコン叩いてみる。

「……………」

「バー?開けるぞ」

「……………」

あまりに反応がないので（さすがに着替えたりはしてないよな）  
と思いながら、おそろおそろのノブに手をかけ、細めに開けた戸から  
部屋を覗く。巴は戸に背を向ける形で腰に手をあてて、俯き加減で  
立っていた。とりあえずは無事のようで翔はほっとした。

「大丈夫？」

その質問に答えずくると勢いよく振り返った巴は、戸に近づくと  
内側から力任せにぐいと引っ張った。戸に体重を預ける形で立っ  
ていた翔はよろける羽目になった程だ。まるで怒っているかのよう  
である。

「いいわよ、勝手に開けなさいよ、私はいつつもあなたの部屋勝手に  
開けてるんだから」

「いや、でも……………」

返答につまる翔など意に介さず、巴は言葉を続ける。

「何か用？散らかっててもよかつたらどうぞ」

そう言って部屋を振り返る巴につられて、翔も部屋の奥に眼をや  
ると、

「うわぁ……………」

思わずこんな声を出してしまった。女の子の部屋を覗いておいて  
これは失礼だ、などと考える前に声が出てしまったのである。気遣  
いの翔をしてこんな声を出さしめた巴のお部屋の様子は次の通りで  
ある。扉に向かって右側の壁を取り巻くように30冊近くの本が一  
部は山を作り、一部は散乱している。更に壁に突っ張り棒でたてつ  
けてあった棚がはずれて棚板が本の山に刺さっていた。散らかつて  
いるというよりは暴れた後のようである。

そして、苛立ったような巴の様子。

「……………何で？」

「何がよ」

巴はもちろん翔にも強く当たるが、怒っているのではない。不機  
嫌なのである。

「何でそんな散らかってんの」

「捜し物よ、見たら判るでしょ」

「え……」

判りませんでした、というような翔の困り顔を見て、眉をひそめながらも巴は追加の答えをくれた。

「煩悶してたの！」

「ハンモン？」

「だから本を読もうと思ったの！」

「うん……？」

「でも本の発見は失敗よ。…棚が壊れただけだったわ」

威勢の良い不機嫌に始まり、何とも悲しげに話を終えた巴は「これで説明は終わり」とばかりに俯いて考え事モードに入ってしまった。そんな様子を半分呆気にとられて見ていた翔はようやく『ハンモン』を『煩悶』に変換し終えたところである。

「えっと、つまり悩み事？」

「……」

「……」

巴の反応は無い。相変わらず一点を見つめ何か考えているようだ。

「……」

「……」

「ねえ、あんた私の事好き？」

「え……！」

翔の質問に答えず次の話題に飛ぶのは相変わらずだが、その内容に思わず固まる翔に答えを求める風でもなく、巴は引き続き考え事をしている。

「……うん、私はね、あんたのことは好きよ。そうね。うん、好き、好き」

コクコクと頷いて一人で納得した巴はコロツと機嫌もよくなったようで、いつもの無邪気さでニコニコしながら、

「何か用だったの？私今から棚を片付けようと思うんだけど。もう

本は要らないわ」

と、何事も無かったように言うと、首を傾けて翔の答えを促した。

「…無事ならいい」

翔も何とかそもそもの目的を思い出して、ぼそぼそと返答した。

「そう、心配してくれてありがとう。大丈夫よ」

「うん…」

じゃあ、と扉を閉め切る直前に巴はちらりと翔に眼をやったが、巴に代わって俯き加減になった翔は気が付かなかった。

ぱたん、と扉の閉まる音がして、廊下に残された翔は思わずため息をつく。静かな廊下では床のきしむ音と雨の音がよく聞こえる。

見慣れた廊下の木目を見つめながら翔は部屋へ向かった。

(うん、そう……)

巴は何事もはつきりしている。本を読んでも面白かった、面白くないと言っし、人にしても好き嫌いがしつかり別れる。翔は何も感じない。本は最後まで文字を追う。人にしても同じである。

## 読書の秋（後書き）

巴ちゃんは翔の話は聞いてないけど翔の顔とはちゃんと会話してま  
す。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9753i/>

---

巴と翔

2012年1月15日00時53分発行